

「宗教」がいかにあるべきかを示す。それは「穏やかでゆつくりとした助言や勧告」を促すべきものであつた。

そのような宗教觀は、彼の関心を神学論争の根拠となる啓示ではなく、自然に基く哲学、とりわけ自然哲学へと向かわせる。ベイコンは啓示が記された聖書と並んで神が残したものう一冊の書物である自然にこそ新たな可能性があり、神の被造物である自然の成り立ちを遡及することによって第一原因である神へと辿りつくのだと考える。

ベイコンが自然の哲学的探求に見出した宗教性を検討するため、彼の死後出版された小説『ニュー・アトランティス』(一六二六)を分析する。物語の中心となる「サロモンの家」別名「六日創造学院」という自然研究・宗教機関は、とりわけベイコンの「宗教」と「科学」を理解する上で重要な素材となる。そこでは自然に対する讃美歌が歌われ、祈りが捧げられていると同時に、動植物の生態や人間の病、鍊金術、光学、音響など多岐にわたる自然研究が組織的に行なわれている。つまり「宗教」的活動と「科学」的活動が同時に行なわれている。ベイコンのこうした組織的な研究の構想は後世において実際に王立協会の設立(一六六〇)を促したがため、一般的には「科学」と結びつけられがちであるが、こうした「科学」の読み込みは、自然科学が確立された後、後世の人間が付したものであるため、そこに自然科学の類似を見出すだけでは彼の思想を十分に理解したとは言えない。

そこで、彼の宗教觀に立ち戻り「サロモンの家」で行なわれている自然研究の活動を再考すると、それが「宗教」として成

立しうることが明らかになる。前述したように宗教改革の影響を受けて育ったベイコンは改革派つまり清教徒よりの教育を受けて育つた。そのため偶像崇拜を嫌い、儀礼ではなく日々の労働を介した贋いの可能性を重視する。こうしたカルヴァン主義的な要請は自然をめぐる考えにも反映され、彼は自然を眺めてその美しさを讃美するという行為は、「神の尊厳」を傷つけるのだと考える。自然崇拜は偶像崇拜と同じく「額に汗をしてパンを得る」という「神の命令」に反したものであり、自然の哲学的且つ組織的な探求こそが彼の宗教的要請に応えた行為であった。

ベイコンが自然の探求に見出した宗教的な可能性には宗教改革の影響が刻まれており、偶像崇拜のように自然を外面的に崇拜するといったものではない。彼が考えた可能性とはカルヴァン主義的な理念にもとづく労働を介したものであり、自然探求という理性を活かした哲学的な行いこそがこうした労働の理念に合致していたのではないだろうか。

ウイリアム・ジェイムズにおける科学と宗教 林 研

ウイリアム・ジェイムズは、生涯にわたって宗教に強い関心を持ち、また科学者の自覚を持ち続けた思想家である。ジェイムズは科学と宗教をどちらも網羅的でなく排他的でもないとしており、両者の対話の立場を取つていると考えられる。では彼

はその対話をどういうかたちで達成しようとしたと言えるだろうか。

ジェイムズの宗教論に特有の視点は、個人の具体的な宗教的経験を中心にはじめる点であり、ここには形式化されていない生きた宗教への志向が明確に現われている。したがって、その宗教論は「外部からエネルギーが賦与される」類の救済現象によりわけ焦点が当たられる。その際、ジェイムズは個人が神的なものを信じるという条件を重視する。なぜなら宗教の場合、「ある事実に対する確信がその事実を生み出す助けになりうる」からである。この見解には、ジェイムズの非決定論的な世界観が投影されている。ジェイムズは自由意志を強く肯定し、宇宙が未決定なものであつて個人の行動がその相貌を変化させるというヴィジョンを描く。意志が意識の流れを方向づけ、それに見合つた行動が行なわれ、それによつて現実世界が創られていくというのがジェイムズ流のプラグマティズムである。

このようにジェイムズにとって信じる意志は極めて重要な意味をもつが、科学の時代に神的なものを信じるには宗教の再解釋が必要であり、そのため彼は「宗教の科学」という構想を描いた。それは諸宗教を学際的な議論に開いて教義を洗練させることを意味し、また立てられた仮説を個人の宗教生活において検証していく営みを含意するものである。この「宗教の科学」は検証のプロセスであり、宗教的命題を証拠によって証明するといった単純な形式のものではない。これのもうひとつの目的は、宗教的仮説を検証する個人の生の充実であった。信じて行動するその積み重ねがその仮説を真理となしていくのであり、

この場合検証の意欲こそが、個人の人生を豊かにしてくれるのである。

ここにはジェイムズの科学觀が反映されている。ジェイムズは科学を「方法」であつて、特定の信念体系を意味するものではないと言う。そのため彼はいわゆる「科学的」な信念、すなはち唯物論や機械的決定論に類するものを徹底して批判する。また、「宗教の科学」がそうであつたように、ジェイムズは科学という方法をプロセスと見ているようである。それは科学的証明の完結を必ずしも目前に期待しないという態度である。科学は普遍的真理を捕まえるものではなく、宇宙のごく一部を丹念に精査していく作業として捉えられる。それでもジェイムズが科学の方法を信頼するのは、それが近似値であれ、検証を通してより真理に近づくからである。ましてプラグマティズムによるなら、「うまくはたらく」という効果こそが重要なのであり、その意義は命題を仮説化することによって絶えざる修正の可能性へと開き、世界の改善に寄与することにあつた。

科学の成果を変化に開かれたものと見る見方は、二〇世紀以降、より優勢となつている。クーンのパラダイム論以来、科学理論が社会的文脈にある程度依存することが示されてきた。また、ジェイムズの世界観は、未決定な宇宙において個人の認識と行動がフィードバックする再帰的なものであり、非線形科学や量子論とも親和性を持つ。こうした科学的真理が可塑的であるという論点は、科学と宗教の議論により興味深い視点を与えてくれるようと思われる。ジェイムズにとって科学と宗教は、いざれも真理を生成しつつあるプロセスであった。つまりどこ

ロジェイムズが主張したことは、個人が生きる世界は常に動的であるということであり、それは世界の断面を切り出して静的な世界観に回収するような一九世紀的科学に対する徹底した批判だったということになるだろう。

「信」をめぐつて

——認知科学的観点からの現実／虚構——

谷 内 悠

本発表は、「現実／虚構」概念の流動性を指摘した上で、発表者が構築した「信」概念を軸とする新たな理論によって、その構図とその奥にある世界認識のあり方を捉えようとするものである。

まず、論理学などの分野で行われてきた虚構的言説の分析（記述理論など）では、例えば、小説に書かれた文章は虚構を表しているということが前提となっていることを指摘した。つまり、客観的にはつきりと「現実なるもの」と「虚構なるもの」が分けられると考えられているのである。しかし、「現実／虚構」の区別は、そのように確固たるものではない。そこで、ヨリマクロな視点を取り入れるため、分析哲学の大家であるクワインの「概念図式」の概念に注目した。「概念図式」とは、経験を整理し、世界を認識するための枠組みであり、言明の織りなすタペストリーのようなものである。

クワインは、自然科学（以下、科学）がもつとも効率のよい

「概念図式」であると言う。確かに近代以降、科学の「概念図式」は生活の多くの局面で正しいものとなつた。それは現実を扱うものであると考えられているため、「科学が認めないものが虚構である」とすら言えるだろう。しかし、科学の「概念図式」においても「現実／虚構」は揺らいでいる。本発表では、ヴァーチャルリアティの例を引いた。中でも、ヴァーチャルリアティの根本を認知科学的に顧みることで、「ほんとうの現実」と思われているものすら、脳が構成したヴァーチャルな世界であると言える、という点は重要である。

さらに、科学という「概念図式」 자체が相対的であるため、「現実／虚構」は二重に揺らいでいることになる。「概念図式」の相対性を論じるためには、クワインの相対主義的立場からはじめ、独自の理論を構築することが必要となる。発表者は、複数の「概念図式」が相対的に可能であることから、状況に適した「概念図式」を選択するための「メタ－概念図式」なるものを措定した。それは、周囲の人たちと共にされており、状況によって適切な「概念図式」を選択することで、人々の円滑なコミュニケーションを可能とする。

そのような「概念図式」の切り替えは、「現実／虚構」の切り替えでもある。ただし、科学の例のように、「概念図式」内で揺らぎがある場合もある。さらに、「メタ－概念図式」をほんとうに共有しているかどうかは証明が不可能なため、実は我々は「メタ－概念図式」、ひいては「概念図式」を共有していると「信」じていいだけということになる。我々が「現実」と思っているものは、「現実であるかのようなもの」に過ぎないのだ。